
A N S W E R

u n i c o r n

PDF小説ネット
Byウメ研究所
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

A N S W E R

【コード】

N 2 6 7 0 A

【作者名】

u n i c o r n

【あらすじ】

欲しいものはたった一つだけ。恋する高校生ナツミが好きなのは、年上、そして何枚も上手な四之宮だった。CALLの続編。

A N S W E R

ANSWER

ANSWER 1 : 「決めた！私もそこで働く！」 (前書き)

CALLの続編です。

ANSWER 1：「決めた！私もそこで働く！」

「何それ。私と仕事どっちが大切なの？四之宮さんのバカ！」

まるで恋人が彼氏に向かって言うような捨て台詞で私は電話を切った。四之宮さんに電話をするといつもこうなる。それは私が四之宮を一方的に好きだからで、愛情の一方通行を意味している。つまり世に言う片思いってやつだ。

四之宮さんとの出会いは一本の間違い電話から始まった。私が一世一代の告白をしようとかけた電話は、全くの赤の他人である四之宮に繋がった。その時は、あんな奴絶対好きになんかならない、そう思っていたのに、人生何があるか分からないものだ。気がついたら好きになっていた。

3

「ナツミおはよ〜」

朝の通勤ラッシュを迎えた駅には、いつもどおりに一番乗りのリョウちゃんがいた。リョウちゃんは黙っていれば普通にカッコイイ。黙っていれば。

「おはよ〜、リョウちゃん」

「ナツミ、顔ひどいぞ。昨日なんかあった？」

ANSWER

「会った早々、その言い草はないんじゃない？」

顔がひどいのは元から、ではなく、昨日四之宮と長電話をしたせいで。とは言っても、いつも私が一方的に話しているだけけれど。しかも、最後の一言が四之宮さんのバカ！だ。自分で言っただけで落ち込む私は、ハルナに言わせたら、後悔するなら、言わなきゃいいと一刀両断されるに違いない。

「ふあああ、おはよう」

噂をすれば、ハルナの登場だ。短いスカートから、すらりと伸びた足に、高校生とは思えないほどの大人びた端正な顔立ちは人を惹きつける。

「おはよ」

「ナツミどうしたの？顔ひどい」

「うわっハルナ俺と同じ事言ってるし」

そう言って大笑いするリョウちゃんを見ていたら何だか無性に腹が立ってきた。私は、リョウちゃんのスネを思いつき蹴り飛ばした。

「痛っ！ナツミひでえ、顔もひでえけど態度もひでえ」

「うっさい、へぼリョウちゃん」

「どうでもいいけど、昨日こそは四之宮さんとデートの約束できたんでしょ？」

ANSWER

ANSWER

朝からハイテンションな私たちとは対照的に、ハルナは核心をついた質問を繰り返した。四之宮さんは今、仕事が忙しいらしい。私と会える暇なんて無いそうだ。その結果、仕事と私どっちが大切かなんて馬鹿げた質問をしてしまった。本当の事を言つと、四之宮さんが何の仕事をしているかさえも知らない。何度か聞いた事はあるが、いつも上手く流されてしまっていた。仕事の話だけではない、四之宮さんには謎が多すぎる。私が四之宮さんに対して知っている事は、携帯電話の番号……。 たったそれだけだ。よくそんなんで好きになつたな、そんな言葉がとんできそうだが、好きになつてしまったものはしょうがない。

「その様子だとまたはぐらかされたでしょ？ 全く、こんな可愛い子ほっとくなんて四之宮さんもバカだね」

「ハルナ~~~~」

私はハルナになら抱かれてもいいと思った。

「相変わらず、うっとおしいね君たち」

私たちは、リヨウちゃんの失礼な発言にも耳を貸さず、がっしりと抱き合い友情を確かめた。こんな憎まれ口をたたくリヨウちゃんも実は、ハルナを好きな事を私は知っている。リヨウちゃんは気付かれていないと思っているに違いない。いつかリヨウちゃんにそのことを話して驚かせてやる。

「てか、四之宮っちとなら、昨日会ったよ？」

ANSWER

「は？」

驚かされたのは私たちのほうだった。

「そういえば一昨日も会った。先週の土曜日も会ったなあ」

「何それ？」

私たちは抱き合ったまま固まった。

「リヨウちゃんなんで、四之宮さんのこと四之宮っちとか呼んでるわけ〜！？私だって呼んだこと無いのに……」

「いや！ナツミ突っ込むところ違うから！問題は、なんでリヨウと四之宮さんが会ってるのかだから」

「そ、そうだよ。リヨウちゃん！なんで四之宮さんと会ってるの？私なんてデートに誘っても見向きもしてくれないのに……」

「バイト先で会ったんだよ」

「えっリヨウちゃんいつからバイトしてるの？全然知らなかった」

ちゃんと話しただろうと言ってリヨウちゃんは深いため息をつくと、諦めたように肩を落とした。つまりリヨウちゃんの話はこうだ。二週間ほど前、カクテルバーでアルバイトを始め、そのバーに、四之宮さんがよく来るらしいのだ。

「まあまあ、それでそのバーなんて言う所？」

「桜木公園の近くのPreciousとこ」

「あつ！！それって私が前、栗沢さんに連れて行かれた所だ！」

「栗沢さんって、酔っ払った誰かさんが危うくお持ち帰りされそうになったって人だったような……。ねっナツミ」

リヨウちゃんはちらりとこちらを見ると、意地悪く笑った。

「だ、誰だったかなあ。わ、忘れちゃった」

あの時の私は、カクテルのアルコール濃度も考えず酔っ払っていた。バカだったと反省しています。ごめんなさい。

詳しい事は知らないが、栗沢さんは四之宮の部下らしい。独特の女の子みたいなお愛らしい外見と、時折見せるクールな表情が印象的だ。初めて会ったときは分からなかったが、彼は魔性の女ならぬ魔性の男だ。四之宮さんも数々の女を泣かせてきたであろう男だが、栗沢さんも負けていないと思う。栗沢さんの天使のような微笑みを見ると、大きなイタズラも笑って許してしまいたくなる。彼は癒し系でもあるが危険人物でもあるのだ。

「決めた！私もそこで働く！」

私の一大決心を聞いて、リヨウちゃんの顔は青ざめた。リヨウちゃんは、酔っ払いに絡まれることもあるとか、帰りが遅くなるとか、まるでお父さんみたいに説教をし始めた。

心配しなくても大丈夫だよ。ナツミはやればできる子だから。そう言っとハルナは、リヨウちゃんの肩を叩いた。

ANSWER

「そんなわけで、リヨウ、面倒見てやって」

「マジかよ……」

落胆したリヨウちゃんを尻目に、私は燃えていた。この気持ちは誰にも止められない。四之宮さんが好きなのだから。

「好きなんです!」

「は?」

30代後半の髭の似合う男は、私の言葉を聞くなり、まるで理解不能な外国語でも聞いたような顔つきをした。

「ですから、私がこの店を選んだ理由はカクテルが好きだからなんです」

「いや、君未成年でしょ?」

開いた口が塞がらないとはこう言う顔の事を言うのだろう。リヨウちゃんの話を聞いて早速、私は今、カクテルバーのアルバイトの面接を受けている。そして目の前に座り、目を点にしているのが面

接官、この店のオーナーだ。

「カクテルを好きなのは分かった」

オーナーは整っているとは、とても言い難い髭を2、3度なぞった。その不精さは、不思議な事に見る人に全く不快感を与えず、逆に清潔なイメージさえ起こさせる。ただ単に似合っているということとも言えるだろうが。

「他にこの店で働きたい理由はないの？」

「四之宮さんです」

「は？」

「この店の常連の四之宮ハジメさんです」

「四之宮なら知ってるけど……」

「大好きなんです！」

「……………」

強烈なアップパーを食らったらしいオーナー。私の話を聞いて固まっ
てしまった。カウンターの隅から見ているリョウちゃんにも、これ
はダメだと半分諦めの色がでている。

しばらくするとオーナーは豪快に笑った。

「気に入った！採用してやるよ！明日からおいで」

ANSWER

「ありがとうございます！」

チャンスは突然やってくる。心配そうにこちらを覗き込んでいたリヨウちゃんは、複雑な顔つきだ。大丈夫、リヨウちゃんには心配かけないから。そう心の中で思い、リヨウちゃんにVサインを送った。困ったように笑ったリヨウちゃんの顔はとても優しくてかっこよかった。ハルナに見せたら、好きになるかもしれない。

……いや、それは無いか。

欲しいものはただ一つ。ねえ、四之宮さん、覚悟してね。

ANSWER

ANSWER 1：「決めた！私もそこで働く！」（後書き）

CALLで書ききれなかったことを思う存分書きたいと思います。
つたない文章ですが、またお付き合い頂ければ幸いです。感想、批評などありましたら、お気軽にお声をかけて下さい。

ANSWER 2 : 「いいから、お前は早く帰れ」

「ナツミ、このグラスを棚に並べて」

「了解」

リヨウちゃんからグラスを受け取ると、綺麗に棚に飾る。薄暗い店の中に、光を浴びたグラスがキラキラと光った。

Preciousで働き初めて3日が過ぎた。オーナーも他の店員も、皆良い人たちばかりだ。酔っ払いはいるけれど、リヨウちゃんが助けてくれていたので、思ったよりも楽しく仕事をしていた。しかし、肝心の四之宮さんにはまだ会えていない。あの日の電話以来、私は四之宮さんに電話をかけていなかった。本当に仕事が忙しいなら邪魔はしたくなかったし、直接会って話したかった。今日こそは会える、そんな淡い期待を胸に待っているのだ。

外はあいにくの雨。それがたたってか、今日は客も少なかった。

「こないな、四之宮っち」

リヨウちゃんがそう言ったと同時に、扉が開く音が聞こえた。私は咄嗟に扉のほうを振り返る。働き始めてから、誰かが来るたびに四之宮さんではないかと思いつり返ってしまう。

そこには、雨に濡れた四之宮さんが立っていた。

「四之宮さん！」

嬉しくて私はそばにあったタオルを持つと、四之宮さんに駆け寄

ANSWER

った。四之宮さんは大きく目を見開き、驚いた様子だ。

「お前！なんでここにいるんだ！」

「はい、タオル」

私はにつこりと笑うと、タオルを差し出した。四之宮さんは、何も言わずタオルを受け取り、ぽたぽたと零れ落ちる水滴を拭き取った。決め細やかな肌に水が滴り落ちていく。端正な顔からは大人の魅力が放たれ、そして、さらに雨に濡れた四之宮さんの髪はより輝きを増して揺れている。いつもよりも、もっと色っぽく見えた。

「リョウ、お前の仕業か」

四之宮さんは、リョウちゃんをぎろりと睨み付け言った。

「嫌だなあ、四之宮うち。そんな怖い顔しないでよ」

「はあ……。ナツミ、なんでこんなところにいるんだ」

カウンターに座った四之宮さんは、長い足を組みかえ、煙草に火をつけた。

「会いたかったんだもん……じゃなくて！違う違う。社会見学！そう社会見学！ね！リョウちゃん」

「会いたかったなんて子供じみたことを言ったら、バカにされるに違いない。」

ANSWER

「そ……そうそう社会見学。これからの高校生はもつと世間を見な
いとー!」

リョウちゃん、ナイスフォロー。四之宮さんは無表情でただ煙草
を吸っている。

「ふーん、そんなに俺に会いたかったわけだ」

四之宮さんは真つ直ぐ私の目を見ると、挑戦的な笑みを浮かべた。

「電話でバカとか言われたから嫌われてるかと思ったよ」

端正な顔立ちから放たれる笑顔は全てお見通しのようだ。四之宮
さんは煙草を灰皿に押し付けた。私は赤くなつた顔を見られなくな
かつたので、違う、とだけ言つと俯いた。

四之宮の目は、私を捕らえて離さない。かと思うといきなり放り出
すかのように冷たくあしらう。私はいつも四之宮の言葉に一喜一憂
するのだ。

「親には言つてあるのか」

「言つてない。だって親は今、NYだもん」

「NY!?!」

リョウちゃんと四之宮さんは同じタイミングで叫んだ。そう言え
ばリョウちゃん達にも四之宮さんにも言つて無かつたっけ。本来な

ANSWER

「私は、一ヶ月前、父親の仕事の関係で、家族みんなでアメリカに飛び立っているはずだった。私はもちろん断った。ハルナやリヨウちゃんと別れるなんて絶対に嫌だったし、四之宮さんと会えなくなるのはもつと嫌だった。」

「お前そんな大事な事をもつと早く言えよ！」

「全くだな」

「四之宮さんはオーナーから差し出されたマティーニを受け取り、一口飲んだ。」

「仕事終わるの何時？」

「えっと10時」

「と言うことはもう時間だな、帰れ」

時計の針はとっくに10時を通り過ぎていた。

「やだよ。四之宮さんが帰るまではいる……」

「ダメ。未成年は午後10時から午前5時まで働いてはいけないことになってるわけ」

「そんなあ、私は力なく叫んだ。」

「オーナー、これからこいつらがちゃんと10時には帰るよ」
「張りつてるよ」

ANSWER

四之宮さんは、煙草に火をつけながらオーナーに言った。

「分かってるよ。しかし、四之宮、お前もそんな顔するんだな」

おかしそうに笑いながら、オーナーは髭を撫でた。

「どつという意味だよ」

「いつも女に誘われても、我関せず、な態度でいるのに。ナツミちゃんの前だとそうもいかねえらしいな」

「それって、私に感心を持ってくれてるってこ………」

「いいから、お前は早く帰れ」

四之宮さんは、私の口を手で覆うと、何も言えなくさせた。四之宮さんの考えてることなんてさっぱり分からない。ただ私は、四之宮さんの手の冷たさにドキリとするだけだ。

「リヨウ、ちゃんと送ってけよ」

「はいはい」

ちえ、せつかく四之宮さんに会えたのに。四之宮さんは何事も無かったかのように飲み始めている。

「四之宮さん、また来てくれる？」

「……ああ、心配すんな。だから今日は早く帰れ」

久しぶりに会ったんだからもつと話していたい。四之宮さんの顔を見ていたら、やっぱり帰りたくなかったけど、今日は大人しく帰ることにした。これからチャンスはいくらでもある。仕方なく私はカウンターを後にする。

「ナツミ」

「へっ?」

急に腕を捕まれ、呼びとめられた私は、間抜けな返事を返した。

「家に一人なんだから。鍵は必ず閉めるよ。あと、何かあつたら電話しろ。以上。ほら、さっさと帰れ」

そう言うと素早く手を戻し、また飲み始めてしまった。優しいんだか、冷たいんだか、分からない。それでもやっぱり心配してくれていることは分かったから、私は嬉しくて笑いを堪えられなかった。腕に残った感触を私は忘れられないと思う。

「何か無くても電話する!おやすみ!」

心配してくれるってことはちょっとは期待してもいいのかな。私は、にやつく顔を必死で隠しながら駅に急いだ。

ANSWER 3 : 「打倒四之宮！」

放課後を迎えた教室には、人もまばらだ。ハルナは鞆から化粧道具を取り出すと、おもむろに言った。

「ナツミ、今日Preciousに行ってもいいかな？二人がどんな所で働いてるのかみたい」

「いいとも〜！」

「うっさい、リヨウには聞いてないから」

リヨウちゃんは、いつものようにうなだれた。

「来て来て！」

でも、そのまま制服で来ないでよ、そう言った私に、ハルナは満面の笑みで、残念と答えた。ハルナだったら本当にやりかねない。

「ナツミ、そろそろ行かないと準備間に合わねえぞ」

「了解〜。じゃあハルナまた後でね！」

お店の制服に着替えた私たちは、何だか落ち着かずそわそわしていた。リヨウちゃんは、ハルナを、私は四之宮さんを待っている。

最初に現れたのは、ハルナの方だった。

「ナツミ、リヨウ、頑張ってる？」

「ハルナ！」

ハルナの、ふわりとスカートを揺らせながら歩く姿は、まるでお人形さんみたいだった。いつもより、気合の入ったメイクでも、厚化粧に見えないのが凄い。ハルナは自分を可愛く見せる術を知っているのだ。

「リヨウちゃん顔がにやけてる。キモイ」

「ばっ……か、んなわけねえだろ」

なんて分かりやすい奴だろう。

「へえリヨウ、制服似合うじゃん」

ハルナは、リヨウちゃんをファッションチェックでもするのかのように見た。

「だろ？」

リヨウちゃんの顔のにやけ具合は相変わらずキモかったけど、確かに制服は似合っている。黒のベストにネクタイ、正装をしているのに、似つかわしくない茶髪とピアスは、ギャップがあつてとても

いい。実際、お店の中で逆ナンされている姿を何回か見ている。黙っていればなあ、普通にかっこいいのに。

「四之宮さんはまだ？」

ハルナは、にやけまくるリョウちゃんを軽く無視すると、辺りに四之宮さんの姿を探した。

「まだ来てない」

「ホントに来るわけ？」

「さあ……」

四之宮さんは、また来てくれるとは言ったけれども、私には本当に来てもらえる自信はなかった。四之宮さんを追いかければ追いかけるほど、遠くに行ってしまうような気がしていた。

大人の女の人みたいに、恋のかけひきなんてできない。追いかけるしかないのだ。がむしゃらに。

「来なかったら、私が首に縄つけてでも連れてきてあげるから！」

本当にそんなことできるのかなんて関係ない、私はハルナの心強い発言が嬉しかった。

「打倒四之宮！」

そう言うとハルナは、拳を大きく振り上げた。大人っぽい外見からは想像できないセリフに私は思わず笑ってしまった。

「打倒四之宮！」

楽しくなってきた私は、同じように拳を振り上げた。リョウちゃんは何か言いたそうに口をパクパク動かしていた。

「俺が何だって？」

「ひっ」

恐る恐る後ろを振り返ると四之宮さんが立っていた。本当に来てくれた。会話を聞かれていた恥ずかしさと、四之宮さんに会えた嬉しさが、ごちゃ混ぜになって、不思議な気持ちだ。

「四之宮さん、お久しぶりです」

ハルナは先ほどまでの表情とは違ってかわって大人の女の顔になっていた。この使い分けが私にも出来ていたら、今頃違う人生を歩んでいたかもしれない。

「ハルナちゃん、来てたんだ」

四之宮さんは、優しく微笑んだ。私に向けられる笑みはいつも子ども扱いしているようなものだったり、挑戦的な表情だったりするが、ハルナに対するそれは一人の女性として対等に扱っている証拠だと思った。

ANSWER

「四之宮さん、ハルナには優しいんだ。ずるい」

「優しくして欲しいわけ？」

そう言って向けられた顔はいつも以上に真剣で、心臓がドキリとなる。

「あ……え……」

「……………クツ。お前は本当にガキだな」

一瞬にして真っ赤になった私の顔を見ると、四之宮さんは必死に笑いを堪えていた。

「四之宮さんだって人のこと言えないでしょ。25歳には見えないよ！もっと上かと思っただもん」

「あ、確かに四之宮っちは老けてる。なんつうか妙に落ち着いてるんだよね」

「お前ら言いたい放題だな」

「25歳ということは四捨五入して30歳！」

「うわ、四之宮さん30代突入だね」

ANSWER

いい加減にしろ、そう言った四之宮さんの顔は全然怒ってなかった。私たちはこの日、本当によく笑った。何気ない会話が楽しくてしょうがなかった。このままずっと、楽しくやっていければいいのに。

変わりたい気持ちと変わりたいくない気持ち。四之宮さんに本当に気持ちをぶつけたら、もう二度と会えなくなってしまうかもしれない。好きだからこそ怖がりになることもある。壊れてしまいそうな気持ちを持って余しながら、四之宮さんを見つめていた。

ANSWER 4 : 「笑ってんなよ」

今日は本当についていない。

「ねえちゃん、可愛いね、いくつ?」

「スカート長すぎだよ。もっと短くしなきゃ」

サラリーマン風の中年のおやじは私を品定めするかのようにゆっくりと全身を見渡す。纏わりつく視線は不快以外のなにものでもなかった。

つい、15分前までは最高の気分だったのだ。ただ品の無い酔っ払い方をしていたサラリーマンの団体を注意しようとしたら性質の悪いおっさんに捕まってしまった。

「業務がありますので……」

精一杯の営業スマイルで、逃げようとするが、そう上手くはいかない。

「そんなこと言わずにさあ……ここ座りな」

私は男に腕を捕まれ、身動きがとれなくなっていた。

「お客様、いい加減にしてください」

「キミ!佐藤部長の言うことが聞けないと言うのか」

長いものに巻かれっぱなしのサラリーマンなんて大嫌いだ。いつもならここでリヨウちゃんが助けてくれるはずだった。でも残念なことになりヨウちゃんはいない。倉庫の整理に行ってしまったのだ。多分後1時間は戻ってこないだろう。

「若いと肌もピチピチだね」

エスカレーターするおやじの汚い手は、私の脚をゆっくりとつたう。全身から一気に血がひき、それは痛みをおぼえるほどだ。

「やつ」

もう限界だった。泣きたくなんか無かったのに、目には涙が溢れる。

「な、なんなんだね君は！」

私の脚を絡みついていたはずの手は、ふいに目の前に立ちほだかつた男によって離され、私はやつとおやじから解放された。

「こいつ俺の連れなんで手出さないでもらえますか」

「っ四之宮さん……！」

四之宮さんの後姿があまりにもかっこよくて、私の心臓は跳ね上がった。顔は見えないが怒っているのは十分に分かるその声は、聞いているだけでも身震いするほどだ。おやじは、急に元気を無くすと、冗談だよと苦笑いをした。サラリーマンの団体はそそくさと荷

物をまとめ、店から出て行った。

あれから四之宮さんは一言も喋らなかった。何も言わずにカウンターに座ると、いつものように笑ってもくれない。

「おいナツミ、なんであんなに四之宮っち、機嫌悪いんだよ」

倉庫から戻ってきたリョウちゃんは不思議そうに四之宮さんを眺める。

「私のせいかもしれない」

私は恐る恐る四之宮さんに近づいた。

「四之宮さん……、さっきはありがとう。なんかごめんね、巻き込んじゃって」

「この店で働くのは今日で辞める」

「さっきの事？あんなのいつもの事だから気にする事ないって」

ANSWER

「いつものこと?。」

四之宮さんの表情は、誰も寄せ付けないような冷酷さがあつた。あの意味美しすぎるその表情に、普段の四之宮さんではないことを感じる。そんなに怒らせてしまったのだろうか。

「あつ、いつもっていつかたまにね。やっぱり私ぐらい可愛いとそりゃあモテモテなわけよ」

「笑ってんなよ」

「えっ?」

「辞める」

「四之宮さん、何に怒ってるの?言ってくれなきゃ分かんないよ」

「もう二度とここには来るな、わかったな」

怒鳴り散らすわけでもなく、いつもの冗談を言うような軽い感じでもない、淡々と話す彼の言葉は、私の心を突き刺していた。

「四之宮さん!目見て喋ってよ!」

大きな声をあげた私の目を四之宮さんはやっと見てくれた。でも、その顔には冷たさしか感じられない。

「いい加減、子供の恋愛ごっこに付き合うのは疲れたんだよ」

「れ、恋愛……?」

「勘違いしていると困るから、はっきり言うわ。俺はお前みたいなガキに興味ないから」

そう言うと彼は席を立った。

私は無性に腹が立っていた。四之宮さんは怒っている理由もなにも言わず、弁解の余地も与えてくれない。

「恋愛ごっこなんかじゃないよ!ちゃんと好きなんだよ。私は四之宮ハジメが好きなの!」

振り返ってもくれない彼に、ますます腹が立った。気持ちとは裏腹に流れる涙は、私を余計苛立たせる。

「絶対辞めないから!四之宮さんを好きな事も、お店も、絶対辞めない!」

四之宮さんは、最後まで振り向かなかった。力なく地面に座りこむと、ぴかぴかに磨かれた床のタイルには、私の情けない顔が映りこんだ。

「ナツミどうしたんだよ!?何があったんだ」

心配して駆け寄ったりリョウちゃんに何か言おうとしても、こみ上げる思いで何も言えなかった。流れても流れても止まらない涙は、おそらく一生分使ってしまうのではないかと心配するほどだった。

「今日はもうあがっていいよ、ナツミちゃん」

一部始終を見ていたであろうオーナーはハンカチを差し出し言った。

「アイツも多分何か考えがあつてのことだと思つから」

「そつだよ、大丈夫だよ、ナツミ。四之宮っち結構飲んでたから酔つ払つてるんだよ。明日になつたら機嫌良くなつてるつて」

オーナーもリョウちゃんも優しすぎる。私は色々な人に応援してもらっていることを思い出した。ハルナもリョウちゃんもオーナーも皆いい人ばかりだ。

「オーナー、リョウちゃん、ありがとう」

手強いのは最初から分かっていた。それでも好きになつたのだから。オーナーからハンカチを受け取ると涙を拭いた。

もう泣かない。いなくなってしまった四之宮の後姿を思い浮かべ、宣戦布告をした。

絶対に辞めるもんか。どんなにこつ酷く振られようと、泣いて腫

ANSWER

れた目がどんなに滑稽だろうと、
今時の女子高生はやっぱりタフじ
やなきや。

欲しいものはただ一つ

ANSWER 5：「四之宮さんのあほー」

もう泣かない。心の中でそう呟くと彼の登場を待った。グラスを磨く手に思わず力が入る。

四之宮さんは、いつものようにPreciousに来てくれた。ただ一つ違ったことは、彼の隣には綺麗な女性がいたこと。

「最近全然遊んでくれないから、凄く寂しかったんだよ」

彼女の甘えた仕草に、四之宮さんは何も言わず、肩を抱き微笑んだ。誰がどう見てもこの二人の関係は恋人同士だ。四之宮さんは一体どういつつもりなのだろう。

私にはどう考えても四之宮さんが、連れてきた女性を本気で好きだとは思えなかった。一種の我慢比べのようだ。彼は、こういうことをすれば私が諦めると思っているのだろうか。大嫌いでも言うと思っているのだろうか。

答えはNOだ。私にはそんなこと関係無い。四之宮さんに気持ちをつ分かってもらえなくても、例えば恋愛ごっここと言われても、好きなものはしょうがない。そう簡単に諦めるつもりは無いのだから。

「ナツミ、やっぱり俺が持って行ったほうが……」

ANSWER

「大丈夫、私にやらせて」

心配するリヨウちゃんに精一杯の笑顔を見せると、カラフルに彩られたカクテルをトレイに二つ載せ、テーブル席に急いだ。そこには、艶のある笑顔を見せる女性と、四之宮さんがいた。

「ソルティドッグ、カルーアミルクでございます」

「ありがとうございます」

そう言った何も知らない女に、私は丁寧に辞儀をした。四之宮さんは何も言わず、ただ私を見据えた。

「ハジメ知り合い？」

女は特徴のある猫なで声を出すと、四之宮さんを覗き込む。

「さあね」

「何それ。ダメだよハジメ」。いくらなんでもこんな若い子に手出しちゃ

「ガキには興味ないよ」

四之宮さんは、にやりと笑って私を見つめた。私は顔が赤くなるのを感じながら、トレイを握りしめた。

ANSWER

「四之宮さんのバカ、アホ、ハゲ！」

「ちょ、あなた！」

私は四之宮さんに私は子供じみた捨て台詞を残して、その場を去った。

カウンターに戻ると、リョウちゃんが待っていた。

「ナツミ、お前とんでもない奴好きになっただな」

「余計なお世話。そう言うリョウちゃんもとんでもない奴好きになつてるじゃん」

「は？」

意味有り気に笑った私を、リョウちゃんは不可解な様子で覗き込

む。

「ハルナのこと。好きなんでしょ？」

「な、なんで知って……！じゃなくて、そんなわけないだろ！」

しどろもどろなりヨウちゃんを私は笑い飛ばした。私の思いも、リヨウちゃんの思いもいつか伝わるといいよね。お互い頑張ろうよ。

「ゴミ捨てていきまーす」

後ろの方から、リヨウちゃんが叫んでいたけど、どうせ今更ごまかしたってバレバレだから、知らないふりをした。

裏口から焼却炉があるゴミ捨て場に急ぐと、空には深い暗闇の中に数え切れないほどの星が轟めき合っていた。深呼吸をして気持ちを落ち着かせる。

「四之宮さんのあほー」

空に向かって小さく悪態をつく。大丈夫。まだやれる。

「あほで悪かったな」

振り返った先には、四之宮さんが立っていた。

「四之宮さん……なんでここに……。あの女の人？」

四之宮さんはポケットからライターを取り出すと煙草に火をつけた。

ANSWER

「帰らせたよ。それにしても、ハゲは無いだるハゲは」

そういつて四之宮さんは笑った。面と向かって話すのも、何だかとても久しぶりに思えた。言いたいことはたくさんあるはずなのに、四之宮が煙草を吸う仕草を見ていたら、胸がいつぱいになってしまふ。やっぱり私はこの人が好きなんだなあ。他人事のように冷静に考える自分がなんだかちよつと笑えた。

「ねえ、四之宮さん。私四之宮さんのこと好きだよ」

「ふーん」

「大好きだよ」

「はいはい」

「凄く好き！世界で一番好き！」

「知ってる」

「四之宮ハジメが好き~~~~~」

「ふはっ、まいった。お前には……負けたよ」

ANSWER

四之宮さんの整った顔がすぐ目の前にあって、私は凄く動揺した。

「四之宮さん、な、な、な、な、なんで……」

「キスしたかったからキスしただけだけど、何か問題ある？」

私は状況が掴めず、固まってしまった。そんな私を無視して四之宮さんは店の中へと戻っていく。

「しっかり働けよ、女子高生」

ANSWER

笑った顔があまりにも可愛かったから、子供みたいだと思ってしまった。

ANSWER 6 : 「正解」

「オーナー修正液ない？間違えちゃった」

「うわー何この英単語の量。覚えられるわけねー」

バイトも学校も休みな本日は、Preciousに客として遊びに来ていた。青春真っ只中の私たちには期末テストという恐怖が迫っている。そこで、誰が言ったかPreciousで勉強会を開くことになったのだ。

「お前ら、俺の大事なバーで消しカス散らかすなよ」

半泣きなオーナーのもっともな意見を取り入れ、とりあえずテーブル席でなら勉強してもいいことになった。

「オーナー、俺マティーニ！」

「調子に乗んな、リヨウ」

「まあまあ、ダンディなオーナー、そう言わずに……」

ハルナとリヨウちゃんの図々しさは今の世の中で生き抜く大事な糧だと思う。結局、オーナーはオレンジジュースを差し入れしてくれた。私たちはありがたく頂くことにして、教科書を開いた。

「ナツミ、ちょっと聞いてんの？」

ANSWER

「……えっ、あ、ごめん。何？」

「だからあ、この英文！」

「あ、うん。えっと」

理解不能な問題の数々にハルナとリョウちゃんが悪戦苦闘する中、私は勉強どころじゃなかった。

テストの点数より問題なのは、昨日のキスなのだ。

一体なんだったのだろう。

空気に流されて？……ありえる、かもしれない。

ただの気まぐれ？……ありえるから怖いな。

好きだから？まさか……。

「ね、今から四之宮さん呼ぼうよ！」

「いやっ、どうだろ！忙しいんじゃないかな」

私はなんだか四之宮さんにどんな顔をして会えばいいのか分からなかった。四之宮さんのことを考えただけでも、心臓がバクバク言ってるのに、本人に会ったら私の心臓は壊れてしまいかも知れない。

ANSWER

「どうしたのナツミ。いつもならバカみたいに喜ぶのに」

バカみたいって、ひどいなあ。

「お、呼ぶ前に本人が来た」

「四之宮っち、こっちこっち！」

こんなんばかりだ。きっと私の心臓はいつか本当に壊れてしま
うに違いない。

「何してんの？教科書なんて開いて」

「期末テストがあんだよ」

四之宮さんは私の隣に座り、教科書をぱらぱらと捲った。四之宮
さんの態度は昨日の事なんて忘れてしまったかのように、自然だっ
た。

「イ、イン お、オールデン タイムズ、ウィッチ ワズ……何こ
れさっぱり意味分かんない」

ハルナは、問題集を片手にブツブツ言っている。四之宮さんは、
そんなハルナの手から問題集を奪い、完璧な発音で英文を読む。

「どれ、Inn olden times, a witch was
thought to take the shape of
a black cat. 昔、魔女は黒猫の姿になると考えられて

ANSWER

いた」

「四之宮っち、すげえ！」

「ハルナちゃん、こんな簡単な英文読めないでテスト大丈夫なのか？」

「だめっばい」

そう言っつてうな垂れるハルナを見て、四之宮さんは困ったように笑った。

「ナツミ、お前はどつなの？」

急に四之宮さんに顔を覗き込まれ、驚いた私は、鼓動が速くなるのを感じていた。四之宮さんの顔を直視できない。

「わ、私は……だ、だいじょうぶ……じゃないけどだいじょうぶ」

「ナツミ意味わかんねえから」

「ていうか、さっきからおかしいよ、ナツミ？」

「あっ、四之宮っちなんかしたでしょ？」

「ああ、昨日キスした」

ANSWER

“ I love you . Please become a l

「えええ！？」

「げほっ、えほっ」

私はあまりの衝撃に飲みかけていたオレンジジュースを、噴出しそうになった。リョウちゃんとハルナは二人して固まっている。当然のリアクションだ。

「ちょ、マ、マジ？」

「ああ」

平然と言う四之宮さんに動揺など全く見られない。それから、強く、凜とした瞳を細め、四之宮さんは笑った。

「ナツミ、問題。この英文の答えは？」

over.”

いきなり投げかけられた英語に困り、私は焦ってしまった。それから1分後、四之宮さんの言った言葉を理解した私は、驚きと喜びでいっぱいだった。

“私は貴方を愛しています。どうか私の恋人になってください”

私は、「はい」とだけ答えると、小さく頷いた。

「正解」

四之宮さんは、大きな手で私の頭を優しくなでた。一瞬夢ではないかと、気が遠くなる。でも確かにそこにいるのは、四之宮さんで、私を包む頼もしい手は、私の愛しい人本人のものだった。

「そんなわけで、俺ら付き合うことになったから」

ANSWER

ANSWER

にやりと笑う四之宮さんには一生敵わないかもしれない、そんな風に思った。

「どんなわけだよ！いみわかんねえ」

「四之宮さん、何もこんな時に言わなくても」

もうちょっとムードのある時に。と文句をいった私を四之宮さんは笑い飛ばした。

「じゃあ、ムード出してやるよ」

四之宮さんは私の手を引くと、強引にキスをした。

「あ~~~~~!!」

ハルナとリヨウちゃんは、またまた固まってしまった。

「四之宮さんのばか」

笑う四之宮さんを弱弱しく睨んでみたけれど、にやつく顔は押さえられなかった。

「まあいいんじゃない、ハッピーエンドってことで」

戸惑うリヨウちゃんを差し置いて、ハルナが嬉しそうに笑う。当分立ち直りそうも無いリヨウちゃんは、バカツプルめ、と呆れて言

った。

ねえ、四之宮さん、私はあなたと一緒にいたらどんな難しい問題でも、正しい答えが導き出せると思うんだ。一緒にいてよ。きつと素敵な女性になるから。

「てか、四之宮っちって、ホント何者？」

「あゝ四之宮グループって知ってる？」

「知ってるけど……ま、まさか」

「あれ、俺の会社」

「鉛筆から車まで幅広くサービスを提供し続け企業を陣取る大手メーカーの四之宮グループ!？」

「ということは、もしかして社長!？」

「いや、社長は俺の親父」

ANSWER

ANSWER

「四之宮っち、四之宮グループの御曹司かよ!?!」

「ナ、ナツミ! 気をしっかり!」

や、やっぱり前途多難かも……

ANSWER

ANSWER 6 : 「正解」 (後書き)

私にとって、ナツミと四之宮は思い入れ深いキャラクターとなりました。今回の反省点を次に活かし、もっともっと上手く表現出来ればなと思います。ANSWERを読んでくださり、本当にありがとうございました。

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2670a/>

A N S W E R

2008年11月7日07時28分発行